
EncounteR 第一章

雨前葉一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Encounter 第一章

【Nコード】

N9654J

【作者名】

雨前葉一

【あらすじ】

マジックブームがある町で起こる中、一人のマジシャンをきっかけに広がっていく事件、事件、事件！

どこかユルい、そんな群像物、始まりです！

01

01

九月八日。

午前六時ジャスト。

枕元に置かれた携帯電話が、起床の時間を知らせる。

アラーム音は数秒で、持ち主の手によって停止する。

少年は起き上がると、両腕を天井に向けて大きく伸びをする。同時に両目には涙も浮かぶ。来ていた寝間着は寝ている間に乱れてしまったらしく、留めていたはずのボタンは数箇所外れている。

少年はベッドから降り、そのまま洗面所で洗顔を済ませると、そのまま自分の髪の毛を濡らし始め、寝癖を直す。量が多いその髪は、高温のお湯で念入りに洗わなければ、寝癖が修正されないのだ。そんな自分の髪型の性質を、毎朝恨むことを忘れない。遺伝というやつらしいので、仕方ないのだが。

それでも自分の髪を短く切ろうとも、彼は考えなかった。いや、考えたところで実行しないだろう。短くしてしまえば、逆に髪の毛の一本一本が立ってしまうのだ。そうになると、自分としての高校生の髪型にはならない。

やはり少し長めに、あくまで自然にセットすることを心がけ、そのままワックスで整えていく。

それが終わるとテレビをつけて、いつも見ているニュース番組にチャンネルを合わせる。それを耳だけで聞きながら、フライパンで豚肉・ニンジン・ネギなどを味付けをしながら炒め、それから炊きたての白米を投入し、さらに生卵を絡めて炒めていく。簡単なチャ

ーハンを作っているようだ。

それを皿に盛って、食卓テーブルに並べる。四人分座れるテーブルに、やはり四つ椅子は並べられているが、座って食べ始めるのは彼一人だけ。

「いただきます」

この家には自分一人しか居ない、なんてことは承知の上だが、それでも子供のころから身についた習慣は、高校二年生になっても忘れることはない。

家中に響く音は、テレビのスピーカーから流れるアナウンサーの声以外には何も無い。

あえて言うならば、開けた窓の外から聞こえる鳥の鳴き声くらいなもの。

つまりを言えば、この家には、高校二年生の少年一人しかいなかった。

「さあ、続いては、最近ブームになっている、”あの”話題です」
ふと、テレビの画面を見れば、右上には『再到来！？マジックブーム！』の文字。

「こちらのコンビニでも、トランプやコインなどのマジック商品が増えていきますねー！」

「ええ、気軽に始められるようにと、納品してみました」

テレビでは、少年にも見覚えのあるコンビニ内が映っており、もちろん顔もはつきり覚えているその店長がインタビューに答えていた。

「ちょっとした『マジックコーナー』とかあるんですねー！」

「ええ、特設コーナーを設けて、徐々に商品の種類も増やしていこうかなあ、と思っています」

「デパートのおもちゃ売り場などでしか見かけなかった、マジック用品が、身近なコンビニでも手に入っちゃいます！みなさんも、このブームに乗って、始めてみては？……それでは、スタジオに

お返ししまーす！」

「はい、えー、僕もトランプとか買ってみたんですけど、なかなか難しいですねえ！ 説明書とか見ても、案外難しいものも多いんですよ！ 最近は随分細かい仕掛けがあるものも多くなってきたらしいですよ！ それでは、CMの後は、気になる本日の気象情報ですー！」

午前六時四〇分。

全国的、とまではならないが、この町で大きくなってきている『マジックブーム』となるものが、ローカル番組とは言え、テレビでも取り上げられるようになった。少年の知る限り、通っている高校でしか流行ってはいないと思っていたのだが、それももう過去の話のようだった。

「マジックねえ……」

口をもぐもぐと動かしながら、誰もいない部屋の中で一人呟く。最後の一口を終えると、コップの水を一気に飲みきり、食器を下げて、リビングを出る。

部屋に向かいながら、寝間着を脱いでいく。それを軽く畳んで、ベッドの上に置く。それから高校指定のワイシャツ・スラックス・ネクタイを身につけ、鏡の前で身だしなみを整える。ネクタイに小さなシワが出来てしまっているようだが、遠くから見れば目立たないだろうか。

「帰ったら、布当ててアイロンかけなきゃな……」

朝七時。

ガスの元栓を閉め、換気扇のスイッチも切る。使い終わった食器にはお湯を溜めておく。窓も閉め鍵を下ろし、それからもう一度鏡の前で服装と髪型をチェックして、鞆を片手に玄関に向かう。高校二年生ともなれば、見た目にはかなり気を遣うものだ。

愛用のスニーカーも、少し底部分が磨り減ってきた。そろそろ新

しい物を買うべきだろうか。

「そういえば、広告とか朝刊に入ってたっけ」

一度止まり、考える。

愛用のスマートフォンで時間を確認する、現在七時八分。

ホームルームが始まるのは八時半、家から学校まで自転車で二〇分。

「ま、帰ってきてからでいいか」

時間にはかなり余裕があるが、彼は振り返らずに、そのままドアを開けて家を出た。

天気は快晴、見渡す限りは雲一つ存在しない、澄んだ青が限りなく広がっていた。風も涼しげで、体に秋の始まりを感じさせた。ワイシャツ一枚では、そろそろ肌寒い時期になったのかもしれない。

「いつてきますっ」

これも習慣、独り言だろうが何だろうが、彼はそれを言うことを忘れない。

午前六時半。

「そんなわけないわよね……うん、絶対勘違い……私は彼を信じてる」

早朝、駅のホーム。電車がもの凄い大きな音を立てて自分の目の前を通り過ぎる音に紛れて、彼女・中之嶋末理はなかのしままつり呟く。

電車は止まり、目の前のドアが開く。中はいつも通りの満員、しかし彼女がドラマや映画などでよく見る、「キツキツパンパン状態」になるほどではない。都会の社会人は毎朝大変なんだなあと考えると、これくらい苦でも無くなってくるものだ。

末理は基本的に、前向きなのだ。

決して、積極的・ポジティブなわけではない。

ちよつとしたことですぐ不安を抱くし、弱音が喉まで込み上げてくるし、どちらかと言えばネガティブ寄りだ。

けれど、彼女はそんな時、自分よりもっと過酷な状況にある人のことを考える。お昼休み前に「お腹空いた」と思った時も、「飢えて死んじゃう人もいるんだ」と考えれば簡単に我慢出来るし、「仕事が辛い」と思った時も、「働きたくても働けない人がいる」と考えれば、どんな厳しい仕事も余裕でこなすことができた。

そういう面で、彼女は前向きなのだ。

けれど、自分の位を下げて物事を考えてしまうこともある。

二年ほど前から、交際している男性がいるが、その彼があまりに誠実過ぎて、自分が小さく見えてしまう。

彼に自分は合わないのではないか。

彼は自分を好きでいてくれるのか。

不安は絶え間なく続く。いつも爽やかな笑顔で自分の名前を呼んでくれる彼の顔も、時々直視出来ないほどに、自分が恥ずかしく思えてくる日だつてある。決して嫌いなわけではないし、むしろ大好きだ。だが、自分への劣等感に近い感情のせいで、最近上手くコミュニケーションが出来ていない気がする。

そんな中で、昨日に二週間ぶりの夕食をした。

いつも裏でどこか彼の表情を伺い続けていた彼女にはすぐに理解出来たことだが、その日の彼の表情は、いつものようなものではなかった。

どこか、落ち着かないというか、目に見えない何かを気にしているというか。

その正体は分からなかったけれど、何かが彼を邪魔しているということは理解出来た。もっとも、それが勘違いである、という可能性も否めないが。

末理は電車に乗り込む。

乗り込んだ車両は、ほとんど異性、ようは男性だった。

なるべく混雑を避けつつ、端の方へ足を進め、もちろん席も空いてはいないので、そのまま壁に寄りかかる。

「はあ……」

その小さなため息も、走る電車の音や、車内に流れる放送にかき消され、気づく者はいない。

彼女は、高校教師という仕事をしながら、恋愛に関する悩みを抱えていたのだ。

彼が何か自分に隠し事を秘めているような、そんな不安。

それでも彼女はいつも通り、「最愛の恋人を事故で失ってしまった人だっている」と考え、その不安を少し和らげることに成功する。

腕時計に目を落とせば、時刻は午前六時五〇分。

今日も一日、仕事を頑張ろうと、意気込む二四歳の秋だった。

03

03

午前八時過ぎ。

公立東高校の中には、生徒の声で溢れていた。

廊下で立ち話をする女子を始め、朝から走り回る男子も数人いた。鬼ごっこをしているらしい男子四人くらいが、教師に注意を受けるまで五分くらい前の出来事である。

二年B組の教室内では、一つの騒ぎが起こっていた。

「さあ皆集まってくれ！ 今日もすげーやつ見せてやつから！」

クラスの生徒を目の前にして、教卓の上に立ってそう叫ぶのは、このクラスのムードメーカー的存在である、伊東六。教卓の上に立ってジャンプまでしているその様子は、クラスメイトからしてみれば見慣れた行動で、それに驚く者もない。

「待ってました！ 今日こそ見破ってやるぜっ」

「俺も、先週のやつも、さっぱりだったからなあ」

そこに三人組の男子が集まってくる。どうやら彼にとっての「常連客」らしい。

「おうよ、どんと来いだ！」

六はそう言うと、そこから飛び降りて床に勢いよく着地する。それから黒板の前に立って教卓に五百円玉を一枚、パチンと音を立ててそこに叩きつける。

「今日のやつを見破ったやつには……五百円だ」

「うおおー!!」

盛り上がるギャラリィ。

その騒ぎを嗅ぎつけて、周りの女子や他の男子も数人集まってき

た。

「ねえ伊東くん、今日はどんなのやるの？」

「よく聞いてくれました！」

質問をしてきた一人の女子を、ビシッと指さす。

「まあ、今日もコインマジックなんだけどねえ」

「またかよ！ たまには違うやつやれよ！ なんかトランプとかハ
ンカチとか使ってさあ！」

「いやー、俺はコインが専門分野っていうか……他は化学と一緒に
俺には到底コントロール不能なんだ」

器用かつ手慣れた手つきでコインを操る六。見せびらかすかのよ
うに、そのコインを右手の四本の指と指の間を使って滑らかに転が
してゆく。

「でもまあ、今日はトランプも使うよ、四枚だけな」

言った通り、ポケットからトランプ四枚を取り出した。それを教
卓の上に置く。

「あとは五百円玉をあと三枚……合計四枚使う！」

「まさか見破ったら一人につき五百円玉四枚!？」

「いや、一枚だけ」

「だよなー、じゃなきゃお前破産するよなー」

「まあ、見破られる自信も無いんだけどねー」

挑発するような目つきと台詞。

自信は満々のようだった。

* * * *

そんな様子は、クラス内全体に響き渡っていた。あだちのそむ

だから、座席の最後尾に位置している安達望にも、その様子は把
握することが出来た。六の姿はギャラリーが覆っているので見えな

いが、彼がどんな表情をしているかは、想像するには容易なことだ。望はそんな騒ぎを耳に入れながら、呆れるような表情で、頼杖をついて携帯電話に目をやる。指は手慣れたように早く動き、ポチポチと地味な音を立てる。何やら文章を打っているようだ。

「あらー、今日もやってるんだねーっ」

「いつものことでしょ」

「まあ、そっだよなーっ。あ、おはよ、望っ」

「ちーっす」

携帯電話からは目を離さずに、隣の席に鞆を置くクラスメイト・忍足夕美おしたりゆうみに右手を挙げて挨拶をする。

夕美も望の言う通り、前で起こっている騒ぎは「いつものこと」でしかなく、特に特別な反応を見せることはない。

「相変わらず素っ気ないねーっ」

「そんなことないよ」

そう言いながらも、一度も夕美には視線を送らない。

夕美も彼のそんな態度には慣れていた。気にすることもなく、「よいしょっ」と席に座る。

「六が目立ちたがり屋なのは、永遠に変わらないと思うよ」

「毎秒って……」

「まあ、それで周りが楽しんでるならいいんだけどねー」

「望、さっきから誰とメールしてんの？」

「……内緒」

* * * *

教卓の上には、六愛用のマジック用のマットが敷いてある。彼にとっては生活必需品の一部みたいなものだった。

六は、学校がある日の朝には、こうやってクラスメイトたちを読

んでは、マジックショーなる余興を披露している。自分の腕に絶対の自信があるのか、「見破れた者には賞金」などというオプションまで添えて、観客を盛り上げる。それを見て良く思っていないのは、真面目な学級委員くらいなもの……となるはずなのだが。

（これ見破ればコミック最新刊買える……）

などと考えながら見ているのが学級委員その人であり、最近の高校では「学級委員＝真面目」などというありきたりな設定は、すでに廃れてしまっているのかもしれない。

「このように、コインはカードで隠しちやいます」

長方形のマットの四つ角に一枚ずつ並べられた五百円玉の上に、さらにそれぞれに一枚ずつ、カードを重ねる。

これから何が起こるのか、六が何を起こすのかは、彼が明かさな限りは分かったものではない。

ギャラリーの男女比率は半々といったところだろう。それでも、女子の中には一人も「賞金」という単語を口に出す生徒はいなかった。もともと、「口に出さない」だけであつたが。

それでも、いざマジック自体が始まつてしまえば、全員が黙り込む。見破る者も必死なのだろう。

そんなことは全く気にしないというように、常に余裕の表情を見せる六は、そのまま演技を続ける。

「んじゃ、一応確認するぞ？ それぞれの四つ角にある四枚のカードの下には、それぞれ四枚の五百円玉が一枚ずつあるよな？」

両手を使つて、一度に二枚ずつカードをめくつては、それぞれの下に硬貨が一枚ずつあることを示す。その動作二回繰り返し、全てのカードの下にそれがあることを見せると、硬貨は移動させないままにカードを先ほどと同じ状態に戻し、再び五百円玉はカードによつて隠されてしまった。

「ここからよく見てろよ？」

ギャラリー陣は、息を呑む。

六は向かつて客側のカードを二枚、両手を使つて掴む。

「カードをめくると、」

二枚を同時にめくると、一方には硬貨はなく。

彼の右手側に持つカードの下には二枚の硬貨が姿を見せ。

「五百円玉が、」

左手は素早い動作で、その後ろのカードへと移す。右手に持ったカードは、二枚の硬貨を再び隠し。

そして、同時にめくる。

「一瞬にして、」

右手のカードの下には、次の瞬間には三枚の硬貨が姿を見せ、左手側のカードの下には、ただマツトの黒色が見えるだけ。

同じようにして、左手を残る一枚のカードへと移し、右手は再び硬貨を隠してしまう。

「瞬間移動してしまうのだ！」

最後の動作、二枚を同時にめくると??

「どうよ!？」

四つ角のカード下に一枚ずつあったはずの五百円玉は、一瞬にして一枚のカードの下に集まってきてしまったのだ。

動作はかなり素早いもので、目にも止まらぬ速さ、とまではいかないが、それでも手慣れたスピードでそれを披露した六の腕前はかなりのものである。

が、しかし。

* * * *

前の方から聞き慣れた、聞き飽きた自信満々の声色が、後ろの二人の耳にも届く。望は相変わらず携帯電話と会話をしており、そんな彼に夕美は絶え間なく話題を投げ続けた。

「内緒って……もしかして望、彼女とか出来たのっ？」

「残念ながら、そんな展開にはなりません」

「残念ながらって……彼女欲しいんだっ？」

「欲しいとも思わないけど、欲しくないとも思わないかな」

「……何それ？」

「今どきの男子って、そんなもんじゃないの？」

「そんなもんなんだ？」

「中学生の時の僕の周りって、『彼女欲しいー』『付き合いたい』の連呼だったけどさ。とりあえず恋人がいれば自慢出来るし大人に一步近づいた気分にもなれる、みたいな、そんな感じかな？」

「望もそうだったのっ？」

「男子だったら誰だって通る道なんじゃないの？」

「そうなんだ。んじゃ、そんな君にはこれを授けようっ」

夕美が鞆の中から取り出したのは、一通の手紙だった。

「……また？」 初めて携帯から顔の向きを彼女に向ける。が、表情はさらに険しいものになった。

それを指先二つで受け取り、一応裏面の差出人欄を見てみると、

『三年二組 忍足夕華』の文字が並ぶ。

「てか夕華ってもう受験生じゃん。そろそろこっこのやめさせなよ」

「仕方ないじゃんっ」

夕美もため息混じりで続ける。

「言うこと聞かないんだもん、年齢的に反抗期ってヤツねっ。って
いうか、これで何通目？」

「二十四通目」

「よく覚えてるわね……」

「記憶力だけは高いんだよ、僕」

「身長は低いのにねっ」

「お前が無駄に高いだけだ」

「それでもあたしより低い身長じゃなくて良かったよね、もしそう
だったら並んで歩けないもんねっ」

「ま、そんなに自分の身長の高さは気にしてないんだけどね」
「そうなんだ？」
「なんで女の人って背の高い男性に憧れるのかが理解不能だ」
「ただの僻みじゃない？」
「そんなんじゃないって」
渡された手紙は開かないままで、鞆の中の一冊のノートの間に挟んでおいた。

* * * * *

一方、教卓の周りの人ばかりは、徐々に散らばり始めていく。
「あれ！？」
ホームルームがあと二分ほど始まるから、ということもあるのだろうが、それでも先ほどまでの熱は一気に冷めたように、何事もなかったかのように生徒達はそれぞれの席へ戻っていった。
「そういえば、一時間目と三時間目、入れ替わり変更らしいよ？」
「えー？　じゃあ一発目から数学なのー？」
女子の一部の会話には、すでに先ほどまでのショーの内容は無かった。

「……どうということ？」
少年は思考を整理した。
マジックは完璧に上手くいった。
ミスもほとんど無かったはず。
あれ、でもどっかでタネがバレたのか？
っていうか、なんで皆そんなにガツカリ顔？
「？」

頭上、脳内共にクエスチョンマークが広がる彼に、まだその場に残っていた一人の男子が追い打ちをかける。

「六よお、それ、昨日テレビの特番で有名なマジシャンがやったんだよな」

「え？」

ここからは、教卓を挟んだ男子二人の会話である。

「ほら、この町じゃマジックってもはやブームだろ？ 誰かさんのせいでさ」

「……」

「だから、昨日の特番だつて見ない奴なんてほとんど居ないわけだ、視聴率もかなり高かったんじゃない？ まあそんなことは良いとして……。しかもそれ、生放送でちよつとそのマジシャン、失敗しちゃつてな」

「は！？」

「タネ……つていうのか？ ようは仕組みがちらつと見えちまつてな。カメラも向きを変えずにそれを撮り続けるもんだから、それが電波に乗っちゃったわけよ」

「何それ、マジシャン失格じゃん」

「まあそれはどうでもいいとして……。だからよ、今度はもっと……なんていうか、『新しい』やつ持ってこいよな」

「つて言われてもなあ」

「つていうか、お前のマジックつて、どこかで見たことあるやつばっかなんだよな」

「え！？ 何それ初耳！」

「皆気い使つて言わなかったけどよ、そういうことだ。もっと修行とか積んで来いよー」

そう言つと、最後の一人も席へ戻ってしまった。

同時に校内にチャイムが鳴り響く。

「伊東くん何やってんの。早く座りなさい」

ホームルーム開始の合図も完全スルーし、六はその場に立ち尽くしていた。

自分は才能が無いのだろうか。
それを認めてしまったら、自分には一体、何が残るというのだろうか。

午前十一時過ぎ。

歩幅は一定、しかしかなりの小刻みで、年齢にも似合わないほどのスピードで歩く一人の中年男性。

髪の毛はだらしく伸びたままで、数ヶ月は切っていないような印象を受ける。それでも最低限の手入れはしているようで、毛先は真っ直ぐ下に伸びている。ハット帽子を深く被り、九月上旬には少し早いのではないかと思わせるようなロングコートを羽織り、両手はそのポケットの中、とぼとぼと歩き続ける。

行き先は、特に決まっていない。

行きたいところが無いわけではないのだが、そこへ出向く勇気が中々湧いてこないのだ。

「この町も随分変わったなあ」

歩く商店街は懐かしいものであったが、そこに並ぶ店には見慣れないものも多かった。

「肉屋とか駄菓子屋とかは統一されちゃったわけか」

男は立ち止まったスーパーマーケットの前で一人呟く。お昼前とということもあって、お客の数もそこそこ多かった。

「そついや朝飯、まだだったな」

男は財布を取り出そうとポケットに手を入れた。足は止めたまま、

自分が道行く人の邪魔になっていることに気づかずに、その場に立ち尽くす。

早朝の便で札幌の空港に到着してから、電車やバスやらで揺られに揺られ、町に到着したのはつい先ほどのことだった。朝寝坊をしたせいで朝食も取らないまま全速力で空港へ向かい、なんとか間に合ったのは良かったのだが、乗り物類には滅法弱く、とても機内や車内で食事を取ろうなどという気分にはならなかった。

起きたのは朝の五時過ぎだったが、この時間まで米一粒どころか水一滴すら口にはしていなかった。

財布の中身は、男の見た目とは裏腹に、それなりの金額が入っていた。これも向こうで最低限のアルバイトをしていたおかげだ。

夢は、漫画家になることだった。

いや、漫画家になることは、なろうと思えば誰にでもなれる。

男は、連載作家になりたかったのだ。

中学生の頃から絵を描くのが好きだった。それも、美術の授業で求められるようなものではなく、根からの漫画の絵を。

高校に入って、自分の好きなことを生かせることが出来るような仕事は、イラストレーターやアニメ関係の物など多くあることを知ったが、それでも彼は漫画家という職業から自分の視点をずらすうとはしなかった。昔からずっと読んでいた少年漫画誌に、自分の絵を載せることが夢だったのだ。

そのためには、やはり連載を獲得すること以外、他はない。

高校を卒業した彼は、親の反対などは耳にも入れず、そのまま自分の信念だけを胸に上京を果たしたのだ。

彼が三十路の仲間入りを果たしてから約三年ほどの月日が経った今、彼は十五年ぶりに地元の町に帰郷を果たした。しかし、自分の両親に連絡も入れていない。この十五年の間、音信不通になっていた、ということはないのだが、一度も顔は合わせていない。

「とりあえず、腹ごしらえからだな」

今日中に実家に顔を出すつもりではいた。それなりに覚悟も決め

て、「経過報告」をしよう。

漫画家としての自分の経過を、報告するときがやつと来た、いや、すでに遅すぎるのかもしれないが。

スーパーマーケットの自動ドアが彼を誘い、男は短い歩幅のまま、店内へと入っていった。

* * * *

同じ頃。

三時間目の授業が終わり、今日の自分の担当の授業は四時間目、昼休みを挟んだ後の五時間目の二年B組の授業のみとなった。

東高の二年英語担当教師・中之嶋末理は、英語科職員室の自分のデスクの上で、憂鬱な気分でした。

「ふう……」

それでも周りには無駄な心配や気遣いをさせるわけにもいかない。彼女は暗い息を吐いたところでそれを後悔し、無理にでもと不自然な笑顔を作ってみせる。

彼女のそんな仕草は、誰の目にも映っていないのだが。

「えーっと、B組の授業震度は、と……」

愛用のファイルを開く。そこには担当しているクラス毎の日誌が姿を見せる。その日、その授業ごとに記されたそれをチェックする。何ページまで進み、何行目まで訳をチェックし、誰に問題を答えさせたかも隅々まで記録されてある。

末理は、マメな女性だった。

「そう言えば、聞きました？ 校長の噂」

「ああ、聞きましたよ、実はあれ、カツラなんじゃないかって話ですよね？」

「まあ噂になるまでもなく、周知の事実だったけどな」

「暗黙の了解ってやつですよー」

「いや、それはちょっと使い方に少しばかりのズレがありませんか？」

「そうですか？ まあどうでもいいですけどね、私たちは国語教師ではないですから」

それでもあなたは日本人ですか。

っていうか、え、あれカツラだったの？

「私、面白がって校長の後頭部目がけて大きなクシャミとか咳とかしてますけど、上手く落ちないものですよえ」

「そりゃ漫画じゃあるまいし」

あなたたち最低ですよ。

「それで、今度C組の奴らと一緒にある作戦を立てましてね……」

「え、それはかなり気になりますね、何ですか何ですか？」

「実はですね……」

コソコソと話せばいいものを、堂々とそんな恐ろしい会話を繰り広げるのは、末理以外の二人の男性英語教師。

末理の向かえのデスクのところでコーヒーを飲みながら愉快に話すのを、全く耳に入れないというのも無理な話である。

どうやら男二人は、小声で「作戦」とやらの概要を話しているらしいが、そこだけは彼女の耳にも届かなかった。

すでに彼女も耳は完全に男達の方に傾いていたのだが。

「……まあ、男性の永遠の悩みではありますけどねえ」

「永遠のテーマでもありますよね」

「お、なかなか面白いこと言うじゃないですかー」

「そうですね？ 国語教師の免許も取れたかもしれませんが、ははは」

いやいやいや。

「末理先生はどう思います？」

「はい！？」

不意に話を振られてしまった。

女性禁制の会話劇なのかと思ったのだが、そうでもないらしい。
少なくとも、この二人にとっては。

「ええええと、校長先生は、ツラ！」

「何言ってるんですか？」

「いあ、いえ、あの、その」

「ハゲてる男の人って、女性目線からすると、やっぱりアウトですか？」

「はあ……」

フサフサよりもハゲが好き、なんて女性がいたとしたら、それもあるかなのものである。

が、しかし。

男性二人を前にして、それを言うのも空気が読めないというものではないか。

この三人以外に、この教室に存在している者は誰もいなかった。
だから、末理が意見の同意や相談などが出来るような同姓の同僚も存在しない。

そもそも、この学校の女性英語教師は、彼女のみである。

「アウトと言うか……」

「アウトと言うか？」

教室内が、数秒間沈黙した。

「……セーフではないですね」

二人は固まった。

あえて女性に意見を求めたのが間違いだったのだ。

そんなことに気づいた二人。

「末理先生もなかなかやりますねー」

「僕と一緒に、国語教師へ転職しますか？」

「いやいや、どっちも教師なんですから、転職って言わないんじゃない？」

「そこらへんは、後でパソコンで検索かけときましようか」

勤勉な彼女でも、この手の会話は本当にどうでもいいような気が

してならない。くだらない、という感想は持たなかったが、二人を相手に会話するのは、少々精神力の浪費が必要になるらしい。

二人が「そろそろ一服しに行きますかー」などと教室から出て行った後、引き算的に彼女はその場に一人になってしまった。特に困ることはないのだが、これはこれでどこか静か過ぎる気がする。

「くうううう……………」

五時間目の授業をどのように進めるかは大体イメージを掴めたところで、彼女は天井へ大きく両手を伸ばし、軽くストレッチ。

そして、一気に解く。

「…………ふう！」

下ろした手をそのまま鞆の中に入れ、携帯電話を取りだした。新着メールはなし、着信もなし。決まってこの時間に、恋人からの連絡があるわけでもないが、それを知ると彼女はどこかに仕舞ったはずの不安な気持ちを呼び覚ましてしまう。

朝の電車内ではきつぱりと忘れようとしたはずの、一つの不安。

いや、まだ勤務中だ、余計なことは考えては駄目だ……。

彼女は両手で自分の両頬を二回叩き、気合いを入れ直す。

「よし」

末理は赤ペンを構え、先ほどの授業で行った小テストの採点を始めた。教室内にはペンの筆跡音だけが響いた。

彼女のその気合いが崩れてしまうまで、まだ数時間の猶予を残していた。

05

05

午後四時半。

携帯を操作する手は止まらない。左手で上手く倒れないように自転車を押しつつ、右手には常に携帯電話を持っている。

「ねえ、そろそろ誰とメールしてるか教えてくれたっていいでしょうっ？」

「うるさい、しつこいぞ」

「ええー？　六ー、望が何か怪しいことしてるぞっ」

「……」

クラスメイトはクラスメイトでも、放課後まで一緒に過ごすような仲までなると、「友達」という意識を越えて「仲間」という認識をお互い持つことも珍しくない。それを言葉にしてまで確認するような青春らしさを謳歌するような三人でもなかったが、毎日帰路は三人一緒に歩く。

安達望の素っ気ない態度は、朝も夕方も変わらない。機嫌が悪いわけではない、元からそういうキャラなのだ。

忍足夕美は常にハイテンションガールを維持し続けている。その姿は他のクラスメイトにも構うことなく見せるし、彼らにだけ特別見せるような顔でもない。

そして。

「六、そろそろ何か喋りなよ。夕美は無視されるのが一番苦手なんだからさ」

「……」

夏休み前、一ヶ月ほど続けてきた朝のマジックショー。

始めたきっかけは、単純に自分の技術の高さを皆に見せたかったから、皆を驚かせたかったからだ。マジックなんてものは観客がいないことには始まらないし、皆の驚く顔も見たかった。

夏休み中は、様々な本を読んだ。有名なマジシャンの動画なんかも見つけて、何度も再生してはそれを参考にしたり、高2の夏、宿題もそつちのけで練習を続けた。

その結果。

「いや、考えてみれば皆の言う通りだよ。凄いのは凄いいんだけど、六のマジックって見たことあるやつばっかだもんね」

「今日のやつも、なんか語尾に『だす』ってつける人がやってるの見たことあるよっ」

「あーあの特徴的な髭の人ね、知ってる知ってる」

「あの人語り口が面白いよねっ」

「……」

伊東六は朝の出来事があって以来、これ以上はないというほどに分かりやすく、放課後になっても『仲間』である二人にさえ口を開かない。

「もういいよ、そつとしようよっ」

「あれ、夕美って今日も部活休みなのか？」

「えっ？」

「だって先週って火曜日以外は僕ら一緒に帰ったじゃん。最近行っていないじゃない？もしかしてサボタージュ？」

「いや、サボってるわけでもないよっ？ちゃんと断り入れてるし

……」

「なんか用事でもあるわけ？」

「いや、用事というか……」

夕美は東高の書道部に所属していた。その性格からしてみれば、疑う者も少ないが、紛れもない事実である。

夕美は小学校高学年の頃から親に書道教室に通わされ、今では毛

筆八段、硬筆七段という実力を持っている。

もつとも、彼女の親が書道教室へ夕美を入れたのも、その落ち着きの無さを少しでも改善させようと企んだものだったのだが。

「決めたあああ！」

「なにっ！？ いきなりっ！？」

突然、六が大きな声を上げた。

同時に押していた自転車と、自分の足を止める。それに合わせて、望と夕美も足を止めた。

「自分だけの何かを、作るしかないよな」

「てかもうマジックやめなよ、いい年して」

「年は関係ねえ」

「んじゃ何が関係あるのっ？」

「……？ ……お、お前は少し黙ってる」

「っていつかもうそろそろ進路のこと考える時期なんじゃないの？」

「高二までは遊びまくるって俺は決めたんだ」

「その遊びにも頭使っちゃうくらい悩んでどうするのさ」

「っていつか、そんな簡単な答え導き出すのにどれだけ時間掛かってるのさっ、もう夕方だよっ？」

「夕美、お前ちよいちよいウザいこと言うよな、やっぱ黙れ」

「なんだよーっ！ あたしには発言権無しかーっ！」

「お、やるかー？」

とても高校生二人の会話には思えなかった。

いつものことだ、そう思い、望は右手を動かし続ける。

* * * *

高校生三人がそれぞれの自転車を押して歩く道の脇には小さな公園があった。遊具もブランコとシーソーくらいなものしか無い。三

人やつと座れるようなベンチは二つあるが、そこには「ペンキ塗り立て」の文字が書かれた紙が貼っており、利用不可能だ。

「コクっちゃえばいいんじゃない？　っていうか、口で伝えないことには何も始まらないってよくドラマとかでも聞くじゃん？」

「それは、そうなんだけど……」

ブランコで揺れる女子中学生が二人。彼女らが通う東中学校は、そこから見える東高校から歩いて五分もかからない距離に位置し、二人は学校帰りの制服のまま、制服が汚れる心配など一切せずに公園に立ち寄っていた。

「恋なんてねえ、仕掛けたもん勝ちってところあるよー？」

どうやら恋愛相談中らしい。

公園の外には、東高からの帰りなのだろう、高校生の姿もちろほら見える。

「結構アタックはしてるんだけどね……なかなか手応えっていうか、そういうのが無くて……」

「アタックって、どんなことしてるの！？」

「手紙……書いたりとか……」

「ええ！？　すごいじゃん！」

「でもでもでも！　……返事とかは……もらえなくて……」

「それって最低じゃん！」

そう言って、一人がブランコから飛び降りる。

彼女の足下の砂が、ズザザッと音を立てた。

「常識無いわねえ、その男！」

「悪く言うのはやめてほしいかも……」

「ああ、ごめん」

「いいんだよ、私が勝手に送り続けてるだけなんだから……」

「そういう問題なの？」

「私は別に気にしてないよ？　読んでくれるとは思っし」

「そっかあ」

公園内には、中学生二人を除いて誰もいなかった。こんな砂場の

一つもないような公園に訪れる親子などはいるはずもなかったし、子供たちがボール遊びをするには規模が小さすぎるのだ。

「っていうかさあ」

「……？」

「そろそろ教えてくれてもいいんじゃない？」

「え、何を？」

「決まってるでしょ」

ブランコに乗ったまま、不思議そうな表情を浮かべる前髪パツツン少女を指さす。仁王立ちを続ける少女は言葉も続ける。

「夕華^{ゆづか}の好きな人だよ！」

夕華と呼ばれた少女は、乗っているブランコの揺れを両足で止める。履いているローファーもそのせいで少し砂汚れが付いてしまった。

完全にブランコが停止しないまま、夕華は降り立つ。

そして、一言。

「私、年上を好きになっちゃったの」

中学三年生の、ちよっとした大人っぽい発言が放たれた瞬間だった。

* * * *

商店街の両端にはズラリと様々な種類の店が並んでいる。その通りの中央には、数メートルの間隔を空けてベンチが設けられている。そこに座って板チョコレートをパキパキと響く音を立てながら食べ続けるのは、どこか清潔感のない中年の男。

ペンネームは音無音^{おとなしいん}。特にこれといって意味なんてなかったし、本名には擦ってもいなかった。ただ何となくで決めた名前だ。

自分をその名前で名乗った時期は、東京で暮らした十五年の中で

一年半くらいしかなかったが、それでもそれは誇りに思えることだった。

何も、夢は届かなかったわけではない。

音無は、一度、夢にまで見た週間連載作家としてデビューしたことがあるのだ。

結果的に連載は二年と保たず、「音無音先生の次回作にご期待ください！」なんて文字と共に打ち切られてしまったのだが。

それでも諦めずに出版社に原稿を持ち込み、編集とも打ち合わせを続けたが、なかなか連載までは漕ぎ着けず、結果、帰郷という選択肢を取ってしまった。かなり悩んだ末の結果だったが、そろそろけじめをつける時期なのだろう。

そもそも、一度だけでも「連載」という名の夢を見させてくれた、と考えてみるのも正解なのかもしれない。

* * * *

高校生三人組は商店街へと入った。夕方にもなればそこを歩く人の数はかなりのものになっており、横に自転車を押して歩くだけで人によっては邪魔者扱いされないこともない。

「校長がカツラって噂、やっぱ本当だったよ」

「えーっ、やっぱりーっ？」

人を避けつつ、先へ進む。

「あ、望ー、今日お前の家行っていいだろー？」

「また？」

「土曜日ぶりじゃん」

「言い換えると一日ぶりって意味だぞ」

「いいじゃんお前一人暮らしなんだし」

「いいじゃんいいじゃんっ！」

「夕美、部活は？」

「しつこいっ！」

「痛っ！」

夕美は望の頬を軽く引つ張った。さすがの望も声を上げてしまった。

望の父親の単身赴任が決まって、それに母も着いていくと言い出した時はかなり驚いた。それほどに父のことを溺愛していたとは知らなかった。

母が大事に育てていた熱帯魚の水槽も「ちゃんと面倒見るのよ」の一言で放置したまま出て行ってしまった。出て行ったと言っても望を置いて東京へ行ってしまったわけではない。彼もこの町に残ることを望んでここにいる。一人暮らしはもう慣れた。

とは言っても、最近では六と夕美を含め、三人の「たまり場」になってしまいつつあるようだ。土曜日朝から晩までボードゲームをして過ごすという、高校生には似合わないような休日の過ごし方をしてしまったし。

「ちょっとパソコン貸してくんない？ ちょっと調べたいことあったよ」

「え？」

「別にいいだろ？」

「……」

実際のところ、別に良くはない。人には見せられないような、やましいものが愛用パソコンの中に入っているわけではないが、それでも見られたくないものはある。

とは言っても、「ゲスト」扱いでログインすれば問題ないか。

「まあ、いいけど」

「さんきゅー」

六は語尾に「」を追加しても良さそうなスマイルでVサインを決める。

「んでさー」

六は左隣の望へ掲げた手を、そのまま180度移動させ。

「お前、部活は？」

右隣の夕美の方へ向けた。

「書道部って、こんなにサボってていいの？」

「いや、だからサボってるわけじゃないんだけどっ」

「んじゃ何で休んでるのさ？」

「……特に理由はないけど……」

口籠もる夕美。

??やはり、最近のこいつはおかしい。

男二人は全く同じ事を考えていた。

「おいおい、俺らに隠し事かよー。ただけねえなあ、不味い、不味いよ」

「あたしは食べ物じゃないぞっ」

「なにこの会話」

それでも、いつも通りと言えば、いつも通りであった。

06

06

午後五時半。

商店街に並ぶ店の中で、かなりの人だかりが出来ている店が一つ。店の見出しには、「八百矢」と白文字で書かれた黒い看板がある。大きな木の板にでかでかと書かれた文字は、上手いとも下手とも言えないような、独特の「味」を出していた。

隣には、最近出来たばかりのスーパーマーケットがその姿を見せているが、それでも主婦たちは好んでこの八百屋を訪れる。昔から今なお、根強い人気を誇っているのだ。

人気の秘密は、野菜や果物の新鮮度が抜群に高いということ。

そして??

「いらつしゃーい! あ、菊池さんどうも」

この少年・加西真琴かさいまことの存在である。

若くて気が利いて、さらにはイケメンなんて存在に、三十・四十オーバーの主婦たちが振り向かないわけがなかった。

「真琴くん、いつもありがとねー」

「いえいえ、お得意さんですから!」

おまけに笑顔も輝いている!

素敵、素敵過ぎる!

「真琴ー、……、あれ、俺、今、何言おうとしたっけ?」

「父さん、読点多いよー」

そしてこの父親。

どこかほのぼのとした雰囲気のある、それでもってどこか気の抜

けた、けれどもどこか愛らしい存在。

この店の「味」の正体は、この二人にあると言っても過言ではない。

真琴の父・加西真澄かさいますみは頼れる父親としてはかなりランクが低いだろう。時に父と息子の立場が逆転する場面があるというほどに、真琴の方が人間としてしっかりとしていた。真琴がそんな人間になったのも、父がこんな風だからという理由もあるのだろう。

客の中には、食事の支度も忘れて、ビニール袋を腕から提げたままで店に残留し続ける人もいる。

時間も時間で、空はすでに夜空へ変わるための準備をし始めてから、すでに数十分が過ぎていた。

「あら、もうこんな時間！」

若者などに時間を費やしすぎたようだった。

「それじゃ、真琴ちゃん、また明日ね！ あ、真澄さんもうもねー！」

「毎度どーもー！」

「どーもう」

気の張った挨拶と、気の抜けたつぶやき。

誰がどう聞いても父親の方の態度は商売としては最低水準だが、それでも皆それに納得しているのだ。随分とおかしな話である。

* * * *

「なーに？ これって弱い者いじめってやつ？」

商店街の中心、人気の八百屋や野菜部門の売り上げがすごぶる悪いスーパーマーケットよりは少し離れたところで、一人の男が頭を掻きむしりながらゆっくりと歩く。

頭はボサボサの金髪。髪の毛の根元の方は新しく生えた黒髪がそのだ

らしなさをさらに強調している。背はさほど高くない、細身でパーカー姿の、どこにでもいるような若者だった。

「んー？ 何だあ、お兄さん。今いいとこなんだから邪魔しないでくれよ」

その声を発したニット帽姿の男の手は、一人の少女の腕をつかんでいた。抵抗する力を、その上を行く力で抑えこむように。

少女は制服姿だった。金髪男にはそれがどの学校のものかは分からなかったが、それでも今日だけで結構な数のそれを見た。

白のブラウスに、紺色のネクタイ。スカートは濃いグレーで、都会の女子高生ほど短い丈でもない。短いマツシュヘアーの髪の色は、濃い目の茶色く染められており、今どきの女子高生と言えるだろう。しかし、少女はなんと言うか、大人しそうな女の子だった。そう金髪男が思ったのは、彼の中で「眼鏡」文学少女」のような式が成立していたからだったのかもしれない。

「早くどっかに行けよ、じゃねえと、お前の身体がどうなるか、俺でも分からねえぞ」

少女を囲む、二人のうち、坊主頭の男が指をパキパキ鳴らしながら警告する。

「……ほら、なんだか嫌がつてるでしょ、その子も。それとも何？ 今からその女の子とデートでもするような約束でもあったのか？ それなら邪魔したかもしれないが、それでもその子の困り果てている顔を見たら、声をかけずにはいられなくてな。どうだい、君。助けて欲しかったら大きく返事をしてみようか」

少女は、そんな金髪の提案にも答えられない。きつとひどく怯えているのだ。

「お前、俺らの言葉は無視ですか、シカトですか、スルーですかあ？」

「あれ、じゃあ俺の勘違いか」

そんなことは微塵も考えてはいなかったが。

「そつだよ、早く行けよ」

自分の正面まで近づいてきた坊主頭も少しも気にしない様子で、ニット帽に今度は腰の後ろに手まで回されてしまっている少女を横目に見る。

そこで、目が合った。

「……あ、あの……！」

初めて少女の声を聞いた。それはその場にいた男三人の全員に言えることだった。

「た、助けてください……」

「ほら、怖がつてるじゃ??」

目の前でニヤリと笑う坊主頭は、そんな金髪の言葉を最後まで聞くか聞かないかのところで、作った拳を目の前の男の腹に向けて放った。手加減は一切無い、自慢の拳を披露する意味も込めて。

「へへ……」

ニット帽のその笑みは、これから少女と何をするかを考える意味も含めた、男に対する哀れみの念であった。

「さ、そこに俺らの車あるからさ。おい、行くぞ」

背を向けて、連れの坊主頭に言う。先ほどの少女の初主張には耳も傾けず、彼女を連れて行くつもりだった。

と、そのとき。

「どわっしやああああ」

聞き慣れた声で、聞き慣れない叫び声が、少女の肩を持つ男の背に浴びせられた。

慌てて振り返ると、そこには向かい合った二人の男がいた。

余裕の表情を見せる金髪男と、何やら右頬を両手で押さえ込む自分の連れが立ち尽くしていた。

「おい、どうした? 早くそんな奴ぶっ飛ばして行??」

「痛てええええええええええ!!」

坊主頭は叫ぶ。商店街に響き渡るような声を、周りの目も気にせず放出し続けた。

「痛い、痛い痛い、痛い痛い痛い痛い痛い痛い」

そう叫びながら、そのままその場に跪いてしまった。そして地面に倒れ込み、ひたすらに自分の頬を押さえ続けるのだ。

自然に、ニット帽の男の手は、少女から離れていた。

何が起きたのか、理解が出来なかった。

??物音一つ無しに、一体何が起きた?

??あいつのパンチを喰らっておいで、何でこいつは立ってられる?

「て、てめえ、何したんだよ!」

「いやあ、ちよつと可哀想だとは思ったけどさあ」

金髪は平坦とした声で続ける。

「ちよつと二本くらい、抜いてやったわけよ」

右手二本の指で摘んだそれを、左掌の上に移して、遊ぶように転がす。

「……………」

叫び声は省略しているが、足下でバタバタと騒ぐ男は今も口元を押さえたままで叫び続けている。その声は止むことはない。

そして残ったニット帽は啞然とする。呆然と、足も動かせないままで、金髪男の異常な、考えられない動作をただひたすらに震える目で見つめるだけだ。

金髪男の左掌で転がされているのは、歯が二つ。

それも、痛々しい真っ赤な液体をたつぷりと付着しながら。

「こつすると、麻酔って結構重要だってこと、身をもって体験出来るよねえ」

「お前…………どうやって…………」

その問いには、その場をまだ離れずにいた少女も同感だった。

「別に腕とかもぎ取ってやろうとか、足の一つ、向きを変えてやりたりすることも出来ただけだね、それじゃ結構目立つと思ったからさ」

二つの歯は、そのまま真上に投げてしまった。それと同時に、金髪は走り出す。

「???え」

ニット帽が気づいた時には、金髪はもう自分の目の前に姿を見せていた。

「ちよつとだけ、苦しもうか」

金髪は、自分の胸のあたりにポンと一瞬だけ手を置いて、それからそのまま自分を追い越して走り去っていかうとした。

「おい、待ちやがれ!」

「おいしいいいい、待つてくれえええ、病院……病院連れててくれえええ」

情けない声で泣き叫ぶ自分の仲間の声に気づく。振り返って自分の連れがそこに倒れているのを置いてけぼりにして、奴を追つか、それとも??。

そんなことを一瞬のうちに考える。

しかし、自分にもある異変が起きていることに気づく。

「……かつ……」

呼吸が、出来ない。

息を吸うことも、吐くことも出来なかった。

「あつ……かつ……」

自分もその場に倒れ込んでしまった。息が出来ないと、上手く動くことも出来ない。それでも何とかゆっくりと向きを変えて、見開いた目で通りの向こう側を見ると、金髪男が女子高生一人の手を取って走り出していた。すでにかなりの距離を作られてしまい、何が起きたのか、何をされたのか、が全く分からないままである。

見渡せば、そこにいるのは騒ぎを聞いて集まってきた野次馬たちだった。

「あ……あ……」

もはや助けを求めることも出来なかった。

周りのギャラリーも、言葉も無くただその場を驚きの表情で眺めるだけであった。

* * * *

「もうこんな時間になっちゃったね」

「お母さんに怒られなきゃいいけど……」

女子中学生二人は、同じ帰路についていた。空は真っ暗ではないものの、すでに暗みがかっていた。日が短くなってきたことを改めて感じさせられる。風も涼しさを通り越して、少し寒いと感じるくらいだ。夕華の長い髪も、その風で静かに揺れる。

忍足夕華は、姉とは違って、かなり落ち着いた性格をしていた。一部からは「根暗」なんてことも言われているが。

それでも隣を一緒に歩く親友・中崎楓は彼女の良き理解者である。なかざきかえで夕華とは反対に、クラスでも中心人物と言っても良い明るさを誇っている。

そんな二人は、一時間ほど公園で話した後、コンビニでちょっとしたお菓子を買って、それからさらにコンビニ前で話し込み、そして現在、商店街の隅を歩く。

「でもいつか返事ももらえるといいよね、その先輩から」
「うん……」

商店街に並ぶ店の灯りで、足下は明るかった。すでに店を閉めてしまった八百屋も見えるが、ほとんどの店は今も営業中だ。

「あースーパーで飲み物買った方が安かったかもねー」

スーパーマーケットを通り過ぎたあたりで、楓は呟く。
それに対する返事は無かった。

「……あれ、夕華？」

不思議に思い、夕華の顔をちらっと見ると。

その夕華も、不思議そうな顔をしていた。

「夕華？」

「楓ちゃん、あれ……」

夕華が指さした方向・商店街の中心になる場所に来た人ばかり。救急隊員らしき格好をした人が、若者二人を運んでいた。しかし運ばれる若者二人に目立った外傷のようなものは無く、そこに集まった人たちには彼らに何が起こっているのかは分からなかった。

一人は延々と口元を両手で塞ぎながら声を上げ続け、もう一人は乗せられた担架の上で少しも動くことはなかった。

「何これ、何があったの？」

「いやあ、俺、一部始終見てたんすけど、全然分からなかったんですよね。なんかあの二人の他に高校生の女の子一人と、金髪の男が一人いたんですけど……なんかごちゃごちゃ言葉が聞こえてきたと思ったら、あの二人はあんな感じで」

「あらやだ、喧嘩かしらねえ」

「いや、でも殴り合いとかは全く無かったっすよ？ あ、でも」

坊主頭の男が日本語にならない言葉で空間に叫び続ける中、そのまま救急車の方へ乗せられていく。

「今運ばれていった人は、金髪の人に殴りかかっていきましたね、でもそれから全然何も起こらなかったっす」

ギャラリイの中で、立ち寄った主婦と、目撃者である若者、二人の会話である。

それを聞いた中学生二人は、大体の概要が分かったところで、再び足を動かし始めた。

「いやー、女の子を助けた金髪の若者ねえ、なんか町には似合わないような事件ねえ」

「なんかドラマみたいな話よねえ」

そんな会話も聞こえる。

「夕華、聞いた？ こんな町でも事件が起こるのね！」

「ちよつと怖いかも……」

「何言ってるの！」

楓の顔を見ると、目を輝かせていた。

「絡まれてる女の子が、見知らぬ男の人に助けられるなんて……な

んてドラマチック！」

「そ、そう？」

「そうよ！ ああ、ウチもそついうの遭遇してみたいなあ」

「物騒なこと言わないでよ」

「こんな平和ボケした町に住んでりゃ、こんなことも思っようになるわよ」

二人が商店街を抜ける頃には、救急車はもうその場にはいなかった。二人はそこで別れ、それぞれの家に何事もないまま到着した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9654j/>

EncounteR 第一章

2010年10月21日23時19分発行